てい、遊び友達の問題がその次であり、遊び場所の問題が第三になっている。

(ロ) しかしその遊びに対する関心の度は保育関係者が期待するほど高くないように思われる。(これについては保育関係者の態度の調査を必要とする)

(ハ) 困った遊びも身体的に危険という面が比較的考えの中心になっていて(例——男児のちゃんばら等と泥棒ごっこ等)、性格形成の問題はあまり考慮されていない。

(ニ) 遊び友達については年少児では友達のないことが問題とされているが、年長児では問題行動がおそれられている。

(ホ) 遊び場所については地域差による態度の差があまり見られない。

(ヘ) 幼児保育の立場から、遊び場所その他について親の一そう関心をもたせる必要があり、遊びの効果や友達についての正しい理解をもたせることが一段と望まれる。

なおこれらの結果および意見はこの遊びの調査の他の部分と関連させて考えられねばならない。

保育学における現在的関心の問題

東京都立大学

三井為友

昭和二十二年の第一回保育学会大会いらい今回の第八回に至るまでの研究発表題目は、シンポジウムも含めて百二十二題目になる。これを凡そその研究内容に従って類別すると、その種別の頻数は次のようになる。

A、幼児教育の周辺を問題にするもの(即ち、施設・保育者・両親等)……一八

B、幼児の身体にかんするもの(保健・養護等をも含めて)……一八

C、保育カリキュラムにかんするもの(保育内容の取扱いをも含めて)……二一

D、幼児心理に関するもの(テスト等をも含めて)……三六

E、保育方法にかんするもの……二六

F、保育学評論にかんするもの……三

つぎのグラフでは、これを大会の回数別に増減の状況をあらわしてみた。(表は頁数の都合で省略)

ここから凡そつぎの三つの問題を考えてみる必要がある。

1. 学会大会での発表は、必ずしもその学問領域での全般的な傾向をあらわしてはいない。医学会や法学会などについては、全般的傾向を代表する色彩が可成り濃厚に見られるが、他の方面では時間的・地理的制約が相当強く働いて、学界の一部の動向しかあらわれて来ない場合が多い。保育学のばあいもこの例外ではないが、出来るだけ色々な制約を破って、その学問全般の傾向を代表するような方向へ持ってゆきたい。

2. 八回の学会大会の集計にあらわれたところをみると、第一位

が幼児心理、第二位が保育方法、第三位が保育カリキュラムとなっている。教育の問題が、対象・方法・内容の三つの要素を特に注目しなければならないことを考えると、これは当然の傾向と言える。しかも、Bの身体面も対象把握の一面であるから、これをDの幼児心理に加えると、対象の問題は五四という圧倒的な多数になる。大会の回数別にみると、幼児心理と保育方法の問題が、近年とみに増加傾向の著しいのにたいして、カリキュラムに関するものは、発足いらい増減がなく、近年逆に減少の傾向さえみられる。これは一つの問題であろう。

3. 特にいちじるしい特長として、保育学評論にかんするものが貧困である。保育にかんする科学の前進のためには、それが問題としているものの課題意識や、分析解明の方法などについて、批判し反省する必要がある。このような評論の活動は、もう少し活潑になってもよいのではなかろうか。

以上三点の問題の背後に、大会での発表のみならず、月刊雑誌や単行本をも含めて通観して、保育学における現在的関心という基本的な問題が横たわっている。研究の関心が、現在の課題に集中的につなぎとめられているのではないか、ということである。

歴史的な研究に関心を示したものとして、戦前には倉橋先生をはじめとする幼稚園史の研究、フレーベルやその他の人の保育思想に関する研究など、かなり多くのものが見られた。戦後のものとしては、古木弘造氏「幼児保育史」(一九四九、厳松堂)と高橋さやか氏「家庭と保育の歴史」(一九五四、博文社)の二つが見られる位である。

保育の問題は、未開拓の分野が余りに多くて、到底歴史的研究にまで手をのばしている余裕がないということも考えられる。

しかし、歴史的な研究なくして、幼児教育の方向が考えられるであろうか。保育対象の把握は、心理学・生理学・医学などによっても、相当に深められるであろう。保育の内容や方法の研究も、現在の事態の改造や分析によって推進せられると思われる。しかし、幼児をどのような方向に形成すべきかということは、現在的関心の事態からのみでは、うまれて来ないと考えられる。

しかも、一歩を進めて考えれば、対象の把握も、内容・方法の批判も、歴史的観点を除いては、著しく根拠が薄弱になりはしないかと憂えられる。いわば、史的研究は、対象や内容や方法の研究にも、内在しなければならないように思われる。

ラッセルは、「教育と善き生活」の中で幼児教育の意義を評価して次のように言っている。

「幼稚園が一般的になったら、今日階級と階級とを分離させている深い溝を一時代で除き去り、今日最も幸運なものに限られて恵まれている精神と身体との発達を、すべての者が享受できるような国民をうみ、今日進歩というものを阻害している病気や無智や悪意などという恐ろしい重荷を取り除くことができる」と。

保育者にとって、このような確信は、歴史的視点あってはじめてうまれてくるものであり、また同時にラッセルの無制限の楽天性もまた、歴史的視点の薄弱さから来るという批判もうまれてくるであろう。幼児教育が一般化し得ない外的な諸困難とのたたかいも、ここからうまれてくるであろうし、このようなたたかいの中で営まれる

保育実践でない限り、保育は箱庭の中のままごとに終る危険さえ持っている。

保育対象を歴史の中に把握するということは、超越的、ドグマ的な歴史を対象に押しつけるということであってはならない。ここに戦時中の幼児観の批判されねばならない点がある。（例えば武政太郎氏「幼児の心理と教育」一九四三、藤井書店）それは、幼児の中に歴史を見ることでなければならない。幼児を個性的に、真に独自のものとして把握することは、ここから可能になるであろう。

なお、これらの点について、Ilse Forest, Preschool Education, 1927, Robert Rusk, A History of Infant Education, 1951, A.J. Sorokina, Lehrbuch der Vorschulpädagogik, 1951 や乾孝・天野章「保育のための児童心理学」などについて考察してみたい。

デューイの幼児教育思想とその現代的意義

大阪学芸大学　小川正通

一、このテーマをとりあげた動機

(1)今日の米・英・日の幼児教育の理論と実際は、デューイの大きい影響を受けている。(2)しかるにわが国の幼児教育界では、フレーベルの名のみ高く、デューイは理解されていない。現代的見地から、デューイを高く評価すべきである。(3)この学会に思想面の発表が少ないこと。

二、デューイの幼児教育関係文献と当時の教育界の状況

ジョン・デューイ John Dewey (1895-1952) はアメリカが生んだ世界的な経験論的哲学者。多数の著書・論文があるが、幼児教育プロパーのものは皆無。しかし私の知る限りでも、「学校と社会」(一八九九)、「学校と児童」(一九〇五英国版)、「思考の方法」(一九一〇)「民主主義と教育」(一九一六) の四冊で、幼児教育に言及、一貫して、フレーベル批判を通じ、自説を展開。しかし体系的ではない。いずれも約四十年以上前の論説。

一九世紀末―二〇世紀初頭のアメリカの一般教育界は、ペスタロッチー、フレーベル、ついでヘーゲル派、ヘルバルト派の欧洲教育思想が紹介、唱導されていた。その間に、アメリカのホール、ついでソーダイクなどの「児童研究」運動が漸く擡頭。なお実際教育では、「書物中心」の旧教育が支配的だった。幼稚園界では、フレーベルの伝統を墨守し、それを一層形式化したブローを代表者とする保守派の力が強く、それにヒルを代表者とする進歩派が対立。論争十年以上。「児童研究」とデューイ・キルパトリックに支持されたヒル派の勝利に帰した。そして「児童中心」に転向し、多少の変遷をへて、これが今日のアメリカ幼稚園教育の本流である。

三、デューイの幼児教育思想と現代的意義

(一)デューイの成長としての教育

人間の生命は発展であり、教育は成長発達に関し、教育過程は経